

18-6

六人の形浄瑠璃

晝夜二部楽行



川高の葉

長安

交樂齋

修梅暉

六月の形浄瑠璃

晝夜二部興行

——太夫・三味線・形人總演出——

(晝の部)

通し狂言
生寫朝顔日記

宇治川の段
秋月弓之助閑居の段
明石舟別れの段
濱松小屋の段
高田驛笑薬の段
奥座敷の段
大井川の段

閉幕 閉幕 幕間

二、〇〇—二、二〇
二、二五—一、二〇
一、一—一、三〇
一、四〇—二、四〇
二、四〇—三、二〇
三、二〇—四、二五

五分

十分

打出し

(夜の部)

伽羅先代萩

御殿の段
政岡忠義の段

五〇〇—六、二〇 十分

大阪地方海軍人事務指導
佐古少尉原作 藤間藤三郎振附
西亭脚色並作曲

赤道 二 祭 場

六、二〇—六、五五 十分

蘆屋道満大内鑑

葛の葉子別れの段

七〇五—八、一五 五分

壺坂観音靈驗記

澤市内より壺坂寺の段

八二〇—九、一〇 夜の部 打出し

昭和十八年六月一日初日
初日晝十一時・夜四時
毎日晝十二時・夜五時 二部開演

・御観覽料・

晝の部
一等 席 二圓五十錢
二等 席 一圓三十錢上り
三等 席 一圓二十錢
夜の部
一等 席 三圓五十錢
二等 席 一圓三十錢上り
三等 席 一圓二十錢
(各等入場税別)

初日各等約二割引
一等御座席は五日前より
前賣切符發賣致し居ます
前賣切符専用電話
南^⑧四七壺番
一殺御用の電話
南^⑦三〇三二番
南^⑥三七八八番

敬弔

故山本元帥國葬當日

(五日)ハ哀悼ノ意ヲ

表シ謹而休演仕候

【書 の 部】

狂言 通し 生寫朝顔日記

宇治川の段

秋月弓之助閑居の段

明石舟別れの段

濱松小屋の段

島田驛笑薬の段

奥座敷の段

大井川の段



宇治川の段

竹本長尾太夫
鶴澤清八

人形役 / 割

浪	浪	奴	乳	娘	娘	僧	宮	宮
		母					城	城
	鹿	浅	深	深	月	阿	阿	阿
人	人	内	香	雪	雪	心	次	次
							郎	郎
吉	吉	吉	吉	吉	桐	桐	吉	桐
田	田	田	田	田	竹	竹	田	竹
藤	多	兵	榮	光	龜	太	光	龜
一	郎	次	郎	造	松	郎	造	松

この曲は最初山田案山子の名で近松徳叟が熊澤蕃山の作と傳へられる「露のひぬ間」の朝顔の歌をもととして「生寫朝顔日記」を作つたが、上演に到らずして文化七年八月（二四七〇）病歿した。翌年、近松柳作「徳叟遺稿朝顔日記」の讀本が刊行され、それが大好評だつたので天保三年正月（二四九二）耶麻田加々子を添削者として「生寫朝顔話」の外題で稻荷の文樂芝居に上演された

秋月弓之助閑居の段

中竹本叶太夫
 切竹本重太郎
 豊澤廣助
 (鶴澤叶太郎)

人形役割割

秋月弓之助 桐竹門造
 妻みさほ 桐竹紋太郎
 娘深雪 桐竹龜松
 娘深雪 吉田榮三郎
 乳母淺香 吉田榮三郎
 奴關助 吉田玉男
 下女りん 吉田龜夫
 萩野祐仙 吉田玉助
 桂庵 桐竹紋司
 瓜生勇藏 吉田玉德

それを更に嘉永三年正月(二五一〇)山田案山子遺稿、翠松園主人校補と銘打ち「増補生寫朝顔話」全十六段として刊行、爾來「朝顔日記」としてこれが廣く世に行はれるに到つたのである。

梗概

頃は五月、新緑の宇治の景色にあこがれ出る人の多い中に、宮城阿會次郎は僧月心と共に宇治橋に來て繪よりも美しい景色に眺め入つた。そして興に乗じて一首の歌を短冊に書き月心老に與へたが、その短冊は風に飛んで深雪が螢狩の遊山船の中に落ちた。

深雪の乳母淺香は船の中に落ちてゐる短冊を拾ひ、その優しい歌を深雪に渡した。深雪はその讀み人をゆかしう思ひ振り向いて阿會次郎と互ひに顔を見合せ、互ひに美しい姿に見惚れた。折節二人連れの泥酔した浪人が深雪の船に飛び込み、暴行を加へようとした。見兼ねた阿會次郎は同じく船に飛び入つて浪人共を追拂つた。深雪、淺香は

宮城阿會次郎 桐竹龜松
宮城阿會次郎 吉田光造

明石舟別れの段

宮城阿會次郎 竹本濱太夫

娘 深雪 竹本文字太夫

船 頭 豊竹松島太夫

ツレ 野鶴 燕治 三郎 作

人形役割

宮城阿會次郎 桐竹龜松
宮城阿會次郎 吉田光造
娘 深雪 桐竹龜松
娘 深雪 吉田光造
船 頭 大ぜい

阿會次郎に禮を述べて杯を差し、阿會次郎は深雪に所望されて朝顔の歌を扇子に書いて與へた。斯うして二人の戀は芽生えた。
折から尋ねて來た奴鹿内と共々阿會次郎は深雪と名残りを惜しみ乍ら去つて行く。——船と陸との二人は、姿の見えずなるまで振返り／＼して別れを惜しんだ。

秋月弓之助は主君の放埒を諫めかねて家老職を辭し、浪人となつて京都聖護院の町はづれ岡崎に隠棲し、朝顔を栽培して花に心を慰めてゐる。彼は妻みさほに、娘深雪の縁談を語り、家に入りの醫者立花桂庵の世話で、宮城阿會次郎と云ふ侍を掣に取る約束をしたと云ふて奥に入る。

深雪は宇治の螢狩に出て、阿會次郎に戀ひこがれてゐたので、乳母淺香から阿會次郎様が掣入りなさと聞き、夢かとばかり喜んだ。然し、桂庵は萩野祐仙と云ふ朋輩を阿會次郎だと偽つて連れ

人形役割割

中 豊竹豊 伊太三
 八 團伊太三
 十 太夫
 仙 松夫
 竹 七五三太夫
 鶴 綱造

手代松兵衛 吉田多三郎
 下女おなべ 吉田兵次郎
 萩野祐仙 吉田玉助
 岩代多喜太 吉田玉徳
 駒澤次郎左衛門 桐田龜松
 駒澤次郎左衛門 吉田光造
 戎屋徳右衛門 桐田政龜

奥庭敷の段

琴
 竹本織太夫
 竹本織太夫
 竹本織太夫
 鶴本重部太夫
 野澤勝部太夫
 野澤錦太郎

顔の唱歌がきこえるので、さても不思議な事と、船から顔を出した。之を見た深雪は驚喜し、親の眠つてゐるを幸ひに船に飛び移り、この奇遇を夢かとはかり喜び合つた。そして共に逃げて退かうと約束した。深雪は兩親へ書き置きを殘さうと我が船へ戻つたが、その時吹き出した追風。船頭は碇をあげよ、帆を卷けよと、船は靜かに動き出した。深雪は悶えて愛人の船にかたみの扇を投げ込む。——斯うして二人は又もはかない別れとなつた。

それからの深雪の運命は、あまりにも悲惨だつた。父母に連れられて國元藝州へ歸つた深雪には縁談が降つて湧いた。その相手は駒澤次郎左衛門。駒澤を聲にせよと云ふ大内の君命だつた。深雪は駒澤が、今は名を替へた當の阿曾次郎だとは知らなかつた。そして阿曾次郎へ立てる操の一筋に家出をしてしまつたのである。それから小瀬川に身

人形役割割

駒澤次郎左衛門門
駒澤次郎左衛門門
戎屋徳右衛門門
下女おなべ
岩代多喜太
朝、朝、顔顔
吉桐吉吉桐吉桐
田竹田田竹田竹
光龜玉兵政光龜
造松徳次龜造松

大井川の段

野竹野竹
澤本澤本
錦雛勝源
太太太
糸夫郎夫

人形役割割

川朝朝
越人
足顔顔
大吉桐
田竹
ぜ光龜
い造松

を投げ様としたこともあつた。又大内家に仇する悪婆にとらへられ、苦しい苦しい目に遭つたこともあつた。然し戀ゆへの一心は、泣きつぶしてしまつた盲目の身もいとはず、あの朝顔の唄をたつきに、一提の三味線を抱へて東路へと深雪をはしらせた。

此處濱松の非人小屋まで辿りついた深雪は、又も里の子たちに乞食よ、非人よと打ちたゝかれるのだつた。以前は家老秋月の娘と云はれた自分の今の身の上が浅ましくも情なかつた。其處へ來かゝたのは一人の女巡禮、それは深雪を尋ねて國元を出た乳人浅香だつた。

浅香は、變れば變る情ない深雪の姿に手を取り合つて泣いた。深雪も、戀ゆへにこの落ぶれた姿を乳母に見られ、たゞもう面目なかつた。

この様子を見た悪者、人買ひの輪拔ケ吉兵衛は深雪を誘拐さうとするので、浅香は健氣にも吉兵衛と切結んだ。吉兵衛は遂に浅香の刃に斃れたが



浅香も瀕死の深傷に、島田の宿の古部三郎兵衛を尋ね守り刀を證據に秋月の娘とお名乗りあれ、と深雪に力を付け、重傷を耐へつゝ深雪に従ふのであつた。

駒澤次郎左衛門は江戸への途中、島田驛の定宿戎屋徳右衛門方に泊るので、萩野祐仙はその前日から逗留し、岩代多喜太と相談して駒澤を毒害しようとして毒藥を鐵瓶の中に入れた。蔭で之れを見てゐた徳右衛門は、駒澤の身に過ちがあつては相濟まぬと思ひ、窃かに鐵瓶の湯をかへ、笑藥を入れて誤魔化し、駒澤に對つてそれとなく注意をした。この言葉がぎつくり胸に應へた岩代、萩野は之を聞き咎めて口論となる。

祐仙は「若し此の湯に毒がなかつたら徳右衛門め赦して置かぬ」として毒味をする。——と忽ち笑藥が利いて笑ひがどうしても止らない。そして多喜太の悪る企みはすつかり外れてしまふ。駒澤は

小首を傾けて奥座敷へ入つて行く。

駒澤次郎左衛門は灯影も淋しい奥の間で衝立の張交にある地紙の歌にフト目をつけた。

それは先年山城の宇治で、戀しあつた秋月の娘深雪の扇に、また逢ふ日迄のかたみにと、書き與へた朝顔の歌である。其後圖らず明石で舟待した時、琴に合せて深雪が節付け、互ひの出船に悲しい別れをして、女が手づから此方の船へ投げ込んだ扇は、今此所に持つてゐる。

誰れが謳ひ傳へて、こんな東の驛路で見られるのだらう——と、昔の思ひ出にふける處へ、宿の主人徳右衛門が來たので、話の序に、此の歌がどうして手に入つたかと訊いて見ると、

「いえ、其歌に就いては哀れな話がございます……」

徳右衛門は語り出した。

此邊を歌をうたつて歩く盲目の女——以前は中

國邊の歴々の娘と云ふ事であるが、尋ねる人があるとやらで家を捨て、諸々方々を流浪する中に、とうとう眼を泣き潰して、後の月までは濱松邊で其歌をうたつて袖乞ひをしてゐると、國許から由縁の女が、たづねて來たが其女も程なく病死をしたので、其後は又一人で此の邊までやつて來る。何が扱、盲目でこそあれ器量はよし、聲はよし、見る程の者がいちぢらしが、朝顔々々と呼んで、今は其歌を知らぬ者もない——と、主人の泪話であつた。

次郎左衛門は聞くよりひしと身に應へて、若しや云ひ交した我が妻ではなからうか——と、轟く胸を押し靜めて、それは哀れな話、旅のつれづれを慰める爲に其女を呼ばうと云ふので、主は心得て立つた。その後へ相役の岩代多喜太がのさくと出て來たが、朝顔が來ると聞くと、乞食を座敷へは通されぬ、と云ひ張るのだ。が、次郎左衛門に云ひこめられて口を噤む時、呼ばれて庭へ通る

替女。召しましたは此のお座敷でござりますか、拙い調べも御笑ひ種、おはもぢ様やと會釋をした。

見ればそれこそ紛れもない深雪のなれの果である。次郎左衛門は不愍の思ひに、こみ上げる涙を呑んで控へて居た。眼前に焦れる人の居るとも知らず、朝顔は探り手に琴掻き鳴らし、露の干ぬ間の朝顔を、涙に曇る爪調べ、岩代は興に入り、今一曲と所望するが、次郎左衛門は之を止めるので、然らば身の上話をと望む。朝顔は宇治の螢狩りの事から、二度目に逢ひは逢ひながら、つれない嵐に吹き分けられ、國へ歸れば父母の思ひも寄らぬ夫定めに、操を破るまいと屋敷を脱出し、さまよふ中に目を泣き潰した次弟を語り、泣くく暇乞ひして何となく耳に残る駒澤の詞を思ひつゝ立歸るのだつた。岩代が奥へ入つた後次郎左衛門は主を呼んで、朝顔をもう一度呼よせてくれまいかと尋ねたが、今夜の間には合ふまいとの返事に

此の前の扇と、金子に秘法の目薬を添へ、後で渡してくれと頼み置いて、心ならずも岩代と共に出立した。

朝顔は何か氣にかゝつて歸つて來たので、徳右衛門は預かりの三品を渡した。此の扇から朝顔は駒澤次郎左衛門を尋ねる宮城阿曾次郎その人と知り、主の止めるも聞かず、降り頻る雨の中を、狂氣の如く後を慕ふて駆けて行つた。

名に高い街道一の大井川は、篠を亂して降る雨に、漲り落つる水音がすさまじい限りである。夫を慕ふ一念に、朝顔は倒けつ轉びつ、漸う川の傍まで辿りついて、駒澤次郎左衛門様と云ふお侍、最早や川をお越しなされたかと問へば、その侍は今の先渡つて、後は大水で川止めだ。と川越の人足共が口々に知らせる。それと聞くより朝顔は、張詰めた力も抜けて、伏し轉び前後不覺に泣いたが、又起上つて見えぬ目に天を睨み、焦れくた

其人に、逢ふても知らぬ盲目の此目は、如何なる悪業ぞや、夫の跡を戀慕ひ、石になつたる松浦濁巾領振山の悲しみも、身に比べては……と口説泣くのだつた。はては未來で添ふを樂しみに、此處を三途の川と定めて、既に身を投げやうとする。

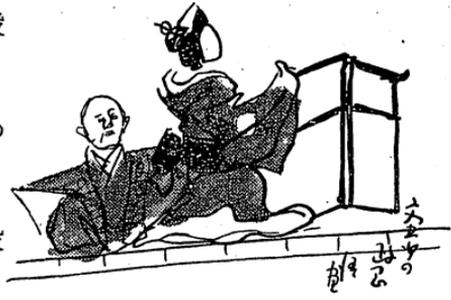
處へ、徳右衛門と下郎の關助とが駆けつけて、抱き止めた。徳右衛門は深雪の乳母淺香こそ我娘と知つて命を棄て、其血で駒澤の残した秘薬を飲ませると、不思議や朝顔の眼は開いた。早明渡る鶏の聲に河の面も白みそめる。

【夜の部】

伽羅先代萩

御殿の段
政岡忠義の段

御殿の段



豊竹呂太夫
豊澤仙糸

人形役割

乳母政岡
吉田文五郎
鶴喜代君
桐竹小紋

人口に膾炙されて居る點でも、この淨瑠璃は今日流行の曲目中屈指の作であります。伊達騒動を脚色した戯曲の中では最も有名な作品で、作者には松貫四、高橋武兵衛、吉田角丸の名が見え、天明五年（二四四五）江戸の結城座の勾欄にかゝつて居ります。

全編九段仕立て、第一が舟岡山、颯躰山、第二が伊達義綱上屋敷門外、第三が貝田屋敷、第四が浮世渡平住家、豆腐屋、第五が近江堅田浦、道行、第六が御殿、第七が明衛屋敷の上使、第八が定倉屋敷、第九が對決になつて居り、中にも六つ目の竹の間から政岡の飯焚き、千松殺しが有名なことは云ふまでもない。

梗概

一子	千松	吉田玉男
妻	八汐	桐竹門造
妻	沖の井	吉田榮三郎
政岡	忠義の段	竹本伊達太夫
		野澤喜左衛門

人形役割割

乳母	政岡	吉田文五郎
鶴喜代君	桐竹小紋	
一子	千松	吉田玉男
妻	八汐	桐竹門造
妻	沖の井	吉田榮三郎
榮御前	桐竹龜松	

奥州五十四郡の城主伊達義綱は江戸の吉原の傾城高尾太夫に溺れ、國政を顧みない所から、奸臣仁木彈正はじめ悪人一黨は、公儀へも憚りありと義綱を隠居させ、幼君一人のお家横領を企て、居た。

幼君の名は鶴喜代君と云つた。乳母政岡は幼君を守つて居たが、彈正はじめ、その一黨の奸策は幼君の身に迫つて居た。幼君毒殺の計が着々とすゝめられて居るのを政岡は知つて居た。それ故、幼君のたべ物もすべて御殿で自ら炊いて差上げて居た。もう一時も油断のならない状態だつたのである。

政岡には一子千松と云ふものがあつた。千松は鶴喜代君のお相手役として御殿へ上つて居た。

今日も御殿で千松が、侍の子はひもじいめをするのが忠義、食べる時は毒でも何でもお主の爲に

はたべる、と云ふのを聞いて、我が子ながら健氣なものと涙ぐんだのであつた。

政岡がいつもの様に幼君の御膳を拵へて居る間、千松は雀の唄を歌つて、幼君の御機嫌をとつて居た。縁先に出した雀の籠には親雀が餌をはこんで居る。これを見た鶴喜代君は、雀がうらやましくてならなかつた。そして又、御膳の残りを頂く狎がこの上なくしあはせに見えるのだつた。政岡はこの様子を見るにつけ、聞くにつけ若君のお身の上を涙をしぼる他なかつた。

やがて御膳も出來た。千松の毒味に喜んで握飯をたべる鶴喜代君の心根を政岡は勿體ないものと思つた。

折から梶原様の奥方御入りなり、と云ふ聲に、政岡はこれを訝しんだ。何はともあれお通し申せと千松にはいつもの事を云ひ含めて奥へやつた。

やがてしとくと一と間へ通つたのは榮御前、政岡はじめ沖の井八汐もこれを出むかへた。

榮御前は夫梶原に代つて鶴喜代君の病氣見舞に來たのだつた。それに持參の菓子折は頼朝公より下され物と云ふのだつた。

榮も八汐も曲者、彈正一味の何を企んで居るか知れない人物だつた。榮持參の菓子折を八汐は引取つて早速鶴喜代に奨め様とした。何と云つても頑是ない幼君はこれに手を出さうとするので政岡は押し止めた。

傲慢な榮は、頼朝公より下さるゝ御菓子、何疑ふて食べさせぬ、是非ともこの榮が食べさせる、と強引である。政岡もこれにははたと當惑した。頼朝公の仰せと云つて押つける榮に何と云つてよいか返答に窮してしまつた。

其處へ奥から走つて出た千松は、その菓子欲しいと云ふなり掴んで口へ入れた。八汐も榮も驚くうちに千松は七轉八倒、果してそれは毒を仕込んだ菓子だつたのである。八汐はすかさず、千松の首筋引寄せて懐劍で突きさした。そして、お上へ

對し慮外の千松この通りと、なぶり殺しにするのだつた。

政岡はぢつと堪らへて居た。これでもか／＼と云ふ八汐に、又別の奸計のあるのを見抜いて居たからである。

一同を別間へ引取らせた榮は、政岡に事のたくみの始終を明し、悠々と歸つて行つた。榮は政岡がてつきり同腹中の者と思ひ込んだのである。それは、最前八汐が殺した千松は、實はとりかへ子の鶴喜代だと思つたのであつた。

榮を見送つた政岡ははじめて我に返つた。そして、慘らしく殺された千松の死骸を抱きしめ、その忠義を讃め、又幼君の御武運を守る神佛に謝した。我が子の殺される様を涙一つ見せず堪へた政岡の心情は忠義の塊りであつたが、今は母として前後亂れて泣き叫ぶ政岡だつた。

文樂座小史（昭和十八年調査）

- 竹本座創立（現今ヨリ二百五十九年以前）
貞享元年二月（道頓堀西ノ芝居）
- 文樂座發祥（現今ヨリ約百五十年以前）
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル
- 第一次稻荷社内時代
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル
- 西横堀新築地濱時代
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル
- 第二次稻荷社内時代
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル
- 松島千代崎橋時代
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル
- 御靈神社内時代
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル
- 松竹合名社繼承
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承
- 御靈文樂座燒失
大正十五年十一月二十九日
- 隨時興行時代
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始メ其他隨時興行
- 四ツ橋文樂座創立
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

艦長「いかさまあれは水鳥にて候」

司令「されば鳥にて候」

さるにてもあの鳥の有情非情は知らねどもつかれし翅止り木に沈みつ浮いつ休るひて、豊年國の秋津洲へ急ぎ行くらん渡り鳥、いざや我等も素敵に必滅期していざ征かん、艦路樂しく進む程、浮べる雲も風もなく、はや赤道につきにけり。

艦長「急ぎ候程に、はや赤道につきて候、いざこれより南海に入り、悪鬼無道の敵艦を索ね、無敵海軍の武威を示さばやと存じ候、先づ申付る事のあるべく候、いかに誰かある」

砲員「まかり御前に候」

艦長「これは赤道につきて候程に、赤道祭執行仕るべくにて候」

それ古へより赤道には、赤道神を始めとして風雷龍の諸神ましまし、破邪顯正をわかち給ふ、實におそれある尊靈なり。

艦長「されば神意を慰めるべく心盡して用意候へ」

砲員「仰せ畏まつて候」

用意とりく時しも颶風、高浪、雷鳴凄しく、艦は木の葉と危ふける。

砲員「あら怪しのこの颶風、如何いたせし事の候」

艦長「いか様いぶかしき事なるかな、察するにこれはそも、悪靈變化の所爲なるべし、いかに砲員、空撃ち、二三射て候へ」

司令「いや先づ待たれ候べし、そも赤道は神域なり、左様の變化ありと覺えず」

それ思んみよ、諸々の生きとし生くる萬物は、草といふも木といふも、この赤道の神靈にて廻れる四季の恵みぞかし

司令「元よりかゝる尊靈の我日本の正義の道、沮める事のあるべけれ」

さらば是より御拜を捧げ、神意を慰め奉り併て我勝を祈念しまつらん、はやとくくと諸共に至誠一心邪念なく、心を淨め禮拜す、折しも黒雲吹き重なり、電光天地に幾千條、はるけき虚空に聲あつて

「そもこれは赤道神とて、邪を討つ正義の神靈なり」

そも大日本帝國の軍艦とこそ見るからに勇武の程を試さんと雷神風神龍神もて試煉の嵐を起せしなり。

「如何に日本の兵ども行方は廣袤、なほく苦難に堪ゆるや如何に」

司令「こは御神意のかしこく候御仰せまでも候はず、惡

逆非道の米英を討ちて絶えさんそれまでは」

艦長「子々孫々の幾百年」

砲員「幾千年の苦難にも」

司令「堪ゆるは日の本皇民の心の程ぞ照覽あれ」

赤道神「こは勇ましき言葉かな、さらば言問ふ、日本は

世界に無二の國體なれ、そは如何なる事か申すべし」

司令「されば候、大日本は、天地開けし始めより 上に

戴く皇の萬世一系連綿たる萬邦無比の神國なり」

へ實にくそれよ、それにこそ、五穀豊饒民榮え、敬神崇祖の道直ぐの誠の心神ぞ知る、宇宙の諸神皆共に千歳萬歳守護あるべし、われは正義の赤道神、法に定めし墨繩規矩、天地均衡保ち良く破邪の劍光顯正の鏡の海を荒すなる、世紀の外道討ちなんにかで神意のあらざらんや、とく征戰の完遂に、進めいざく皇國の正義の艦の

軍人。

「あな有難き御詔かな、さらばいかなる難航も衝きて進み申すべし、全員部署につき候へ」

畏つて候と各々勇氣百倍に汽罐も裂けん最大戰速、全員火玉の皇魂に、突きて突き突き、突き進めば吼ゆる巨浪の激しさに押しもまれ、又突戻され、戻れども突き進む不撓不屈の魂を今ぞあらはす神洲の男子の意氣ぞ比類なき時に大音赤道神喜悅の御聲ほとばしり

「まこと皇魂見極めけり、いかに四海の雷龍諸神とく靜まりて守護ぞあれ」

と高聲一喝逆まきし浪も納まり軟風に天日燦と輝きて翻翻たりけり軍艦旗。

艦は南の海原に衝き進みてぞ勇ましき、實に頼もしき正義の道、啓きて征かん兵はこれ日の本の寶なれ、そも諾冊の二尊より國是ゆるがぬ神國のその君が代の恵みこそ今ぞあまねく大東亞十億民日のものとの御稜威は四方に輝きて常世豊けき瑞穂なる美し御國は千代よろず盡きぬ眞砂の巖となりて苔のむすまで榮ゆらん。



葛の葉子別れの段

中 竹本住太夫

野澤吉三郎

切 豊竹古鞆太夫

鶴澤清六

蘆屋道満大内鑑

葛の葉子別れの段

この曲は信田森の白狐と安倍保名と契つて阿倍晴明を生んだと云ふ有名な信田妻の傳説に基づく劇曲中の代表作と云はれるもので享保十九年十月十五日(二三九四)より竹本座興行。全五段よりなり竹田出雲の單獨作である。尙、この作は延寶六年(二三三八)刊行の山本角太夫の正本「信田妻」、及びその改作で、正徳三年(二三七三)豊竹座上演の紀海音作「信田森女占」や、これより以前に歌舞伎でも演じられた作などを總合した上に、更に結構を大がかりにし筋を複雑にし、場面の變化を多くしたもので實に信田妻の集大成とも云へるものである。この大内鑑の後には他流の語物としても種々あるが、清元の「保名」など殊に世に知られてゐる。

尙、この大内鑑の初演の時に始めて與勘平、野干平の人形を三人で遣ひ、これが人形三人遣ひの源流になつたと云はれてゐる。

人形役割

狐	信	庄	葛	阿	阿	荏	信	落
葛	田	司	の	部	部	柄	樂	合
の	庄	奥	葉	保	葉	團	運	藤
葉	司	方	姫	名	子	八	造	次
吉	桐	吉	桐	吉	桐	吉	吉	吉
田	竹	田	竹	田	竹	田	田	田
榮	政	小	紋	文	小	常	兵	玉
三	龜	兵	司	五	紋	次	次	男
		吉		郎				

尙、この葛の葉子別れの段はその第四段目に當つてゐる。

梗概

天文博士賀茂保憲の死後、その秘書を二人の高弟蘆屋道滿と安倍保名との何れに傳へるかに就て争が起つた。然し賀茂家の養女禰の前は保名とは戀仲だったので、彼に譲らうと謀つたが秘書は既に道滿の方に奪はれ、爲めに禰の前は自殺して果てる。成行を氣遣つてゐた保名は悲しみの爲めに發狂し、形見の小袖を抱きしめて迷ひ出る。——奴の與勘平もその跡を追つた。

信田の庄司の娘葛の葉姫は悪夢が氣にかゝるので、姉禰の前の身の上を祈願の爲め信田明神へ參詣し、序に幕を打たせて花見の宴を開いてゐた。其處へ戀人の小袖を肩にして、素袍袴を踏みしだきつゝ狂へる保名が迷ひ來る。然し、幕の内から禰の前と瓜二つの葛の葉が出て言葉かけると忽ち保名は正氣となり、二人の間に早くも戀が新に芽立つた。



くつろぎ
 静かな
 静かな

さ
 ら
 ら

静かな
 静かな

静かな
 静かな

此処橋下

豊洲右衛門

木太夫

右衛門申持

静かな

葛の葉には兼ねて執心の石川悪右衛門がゐた。その悪右衛門が信田森に白狐狩をした。そして白狐が狩り出されて来たが保名がそれを助けた。

奴與勘平に送られて葛の葉姫は庄司屋敷へ歸へつて行つた。その後へ悪右衛門が再び襲つて來、保名も危くなつた時、さきに助けた白狐が葛の葉の姿で現はれ保名を助ける。そして二人は阿倍野の里に隠れ住むことになつた。然し保名はこの葛の葉が白狐であるとは知らなかつた。

斯うして保名はいつか狐葛の葉と二世を契り、それから六年の歲月が流れ、今では五歳になる童子まで儲けた。

久しく音信のない保名の留守宅へ信田の庄司夫婦は娘葛の葉を伴つて來た。機織る音を不審に思ひ窓を覗いた庄司は、不思議や娘と寸分違はぬ女尻が機を織つてゐるので驚いた。其處へ保名が歸宅し、葛の葉が二人居るのを見て呆氣にとられたが、庄司に勵まされて、女房の葛の葉に、庄司夫

婦と行合ふた話、日暮にはこゝへ來られうから迎への支度をと云ひつけて様子を窺つてゐた。

と、知るや知らずや、女房葛の葉は悄悄とした姿。童子を抱き上げ咽び入つたが氣を取り直し、我は眞は人間ならず、六年以前信田にて悪右衛門に狩出され、死ぬる命を保名殿に助けられ、再び花咲く蘭菊の千年近き狐ぞや……と本性を明し、長々と哀別離苦の詞を殘し、童子に教訓して慟哭した。聲に保名や庄司夫婦葛の葉姫まで共に駈け出した時、狐葛の葉の姿は消えてしまつた。

ふと見れば障子に一首の歌が殘されてゐる。——戀しくば尋ねきてみよいづみなる信田の森のうらみ葛の葉。保名、童子、慕うて呼べど叫べど返事もなかつた。

葛の葉姫は改めて保名と夫婦となり、童子を育てる事になつた。



澤市内より壺坂寺の段

人形役割

座頭 澤市 吉田 玉助
 女房 お里 桐竹 紋十郎
 觀世 音桐竹 紋司

豊竹 松太夫
 鶴澤 道八
 鶴澤 友平
 鶴澤 友衛門

壺坂觀音靈驗記

澤市内より壺坂寺の段まで

この「壺坂」は「良辨杉」等と同じく、名人豊澤團平とその妻加古千賀との夫婦の協力によつて生れた明治時代の新作淨瑠璃中、最も人口に膾炙した曲である。元來この「壺坂」は「西國卅三所觀音靈揚記」と呼ぶ各寺一段の形式をもつ作者不詳の合作物の中の一役の中に當るもので、恐らく西國第六番の札所大和壺坂寺に流布してゐる縁起に加筆した程度のものが臺本となつてゐたらしく、それを更に千賀女が補筆改作して成つたものが現在の「壺坂」で、作品として構成は至極單純、これに夫の團平が節付けして、始めて「壺坂」正しくは「卅三所花の山壺坂靈驗記」が生れた。但し團平の節付けも今日の「壺坂」に大成するまでには前後二段の改訂を経てゐた最初、千賀女の加筆した「壺坂」に節付けしたものを床にかけたのは島太夫で、明治十二年十月大阪大江橋の席であつた。それを受けて二度目に名人住太夫（越太夫時代）が語つたが、一時中絶した。後、三代目大隅太夫が

更にそれを傳承して、明治廿年二月十日から稻荷の彦六座で團平自らの糸で語ることになつたが、この時團平は前の節付けを全然改めて今の様なグツと派手で流麗巧緻なものにしてしまつた。斯うして俄然人氣に投じ、流行を極はめ、一般化されて今日に至つた。

梗概

大和國壺坂寺の片邊りに澤市と云ふ座頭が住んで居た。女房のお里は座頭の妻には惜しい程美しいと云つて近所でも評判だつた。それが盲目の澤市には秘かにねたましかつた。それにお里と夫婦になつて丸三年、毎夜七ツの鐘が鳴るとそつと家を抜け出して行くお里が不審でならなかつた。誰かお里が思ひを通はず男があるに相違ないと澤市は思つてゐた。然し盲目の自分の身を考へるときは僻みさへ加はつて、いつそ黙つて居やうとも考へた。とある夕方である。澤市はいら／＼する胸をしづめて、鐘の音さへ身にしみて思ひ出す程な「鳥のこゑ、鐘の音さへ身にしみて思ひ出す程なみだが先へ落ちて流るゝ妹脊の川を……」

澤市は自分でこの唄がかなしかつた。

めづらしく三味線などを弾いてゐる夫の姿がお里には機嫌よく見えなくもなかつた。お里がそんなことを云ひ出すのが澤市は心外だつた。いつそのことお里に云つてしまはう。澤市はさう決心した。そして今迄不審に思つて居た事などを怒りの聲さへ交へて語つたのだつた。それを聞いたお里は、その譯を今まで話さなかつたとは云ひ乍ら、夫の言ひ分が自分の心に引き較べてあんまりなのに泣きくづれた。譯はかうだつた。澤市とお里は従兄妹同志一緒に育てられた仲だつた。その中に澤市は疱瘡にかかつて眼までつぶれてしまつた。然しお里は貧苦の中にも夫を思ふ一心に働いた。そして澤市の眼病平癒のため、この三年の間と云ふもの雨の夜も雪の夜も壺坂の觀音へ跣足詣りをつゞけて居たのだつた。それと解つてみると、澤市は貞節な妻の前に自分がならべた邪推がはづかしかつた。そしてお里に泣いて詫びるのだつた。すべてを打明けたお里は、澤市の心を引立て、

一緒に観音へ参詣してみたら、とも云つた。腑甲斐ない自分をさうまで云つて呉れる女房に對しても、眼が開くものなら開きたいと澤市は思はないでは居られなかつた。何時の間に夜になつた。お里に手を取られた澤市は峻しい坂道をやつた。ことで壺坂の観音堂まで辿りついた。二人はつゝ、まじやかに西國六番の札所此處壺坂観音の御寺に額づいて御詠歌を上げた。この眼が癒るものか、三日の間此處に籠つて祈らうと、澤市はお里をその仕度に家へ歸してしまつた。然し澤市はもう決心して居たのだ。あの貞節な妻にこの上面倒を見て貰つても所詮は治ることのない業病、いつそひと思ひに谷へ身を投げてしまはうと思つたのである。杖を力に澤市は裏山へ上つた。遠く聞える谷間の水音をしるべに、唯未來を祈つて身を躍らせて谷底深く身を投げた澤市だつた。

一人残して來た夫の身が案じられ、お里は御寺へ立歸へつてみると夫の姿は見えない。呼べど叫べと松風と谷の音ばかり。お里は狂氣の様に澤

市の行方を尋ねた。ふと見ると崖の上につき立てた見覚えのある夫の杖、はるか谷底を見やれば、さす月光にあり／＼と澤市の姿さへ見えるのだ。夫澤市を失つてお里はどうして生きて居る甲斐があらう。お里も澤市の跡を追つて、谷間へ身を投げたのであつた。

やがて夜が明けかゝる頃、谷間に横はつた澤市お里の死骸には夜明けの風がつめたくあつた。何處からともなくかほる靈香、妙なる音楽につれ、あり／＼と姿を現し給ふたのは壺坂の觀世音だつた。

觀世音は澤市、澤市、お里、お里と二人を呼びさますのだ。二人は眠りから覺めた様に眼を開いた。お里の貞心に佛も感じ、二人の命を救つたのである。さう云へば澤市の眼を開いて居た。觀世音は、三十三ヶ所の靈場を巡禮して佛恩に報ひよと云ひ残して姿を消してしまつた。

二人の喜びは何にたとへ様も無かつた。たゞ相抱いて躍り狂ふ二人だつた。

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は

既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場である。

文樂座人形淨瑠璃は

日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませう、皆様の御期待に背かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尙御す氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は

正面一階に御預り所が御座ります。お囃子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますからお服物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は

各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます。お煙草は一階、二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

賣店

二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。

場内にて

寫眞撮影は絶對にお断り致します。

御休憩の間は

一階西側に給茶處と二階西側に大休憩所の設備が御座ります。辨當御持参の御方は何卒御利用下さい。

お出口は 下足札赤札は正面西木家人口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號人マークを付けて居りますから御用の節は御申附け下さい、其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程を願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め御承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上ける事に致しました。御一報次第参上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑦三七八八番

松竹株式会社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十八年五月廿八日印刷
昭和十八年六月一日發行

大阪市東區久左衛門町八番地
發行所 松竹株式会社 大阪支店

大阪市東區久左衛門町八番地
松竹株式会社 大阪支店內
編輯兼 發行人 鳥江 鎮也

一 部 金 二 十 錢

